

研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 5 2	滋賀医科大学福祉保健医学講座
題名 (原題/訳) Patterns and determinants of alcohol consumption in people aged 75 years and older: results from the MRC trial of assessment and management of older people in the community. 75 歳以上の高齢者の飲酒パターンとその規定要因：地域における高齢者の機能評価と管理に関する Medical Research Council トライアルの結果から	
執筆者 Hajat S, Haines A, Bulpitt C, Fletcher A.	
掲載誌 (番号又は発行年月日) Age Ageing. 2004; 33: 170-177.	
キーワード alcohol, older people / アルコール、高齢者	
要 旨 背景 高齢者の飲酒習慣やその規定要因についての研究は少なく、この年代の常用飲酒者や多量飲酒者の頻度や特徴についての情報は限られている。高齢者の飲酒量別の社会経済状況や健康状態を明らかにすることは重要である。 対象と方法 Medical Research Council の高齢者の機能評価と管理に関する研究は、75 歳以上の地域在住高齢者を対象とした障害のスクリーニングを目的とした無作為化比較試験である。イギリス各地の研究参加家庭医のうち、53 の家庭医を受診している高齢者を研究対象とした。これらの医療機関では、簡単な健康状態のスクリーニングを行った後、全員に詳細な飲酒習慣を含む調査を実施した。調査は 1995 年～1999 年にかけて実施された。 結果 15,358 人のうち 14,962 人 (97%) について飲酒に関する詳細な調査が実施可能であった。平均年齢は 80.3 歳で女性が 62% を占めていた。イギリスの専門家の規定 (Royal College of Physicians, Psychiatrists and General Practitioner) では、飲酒量の安全域を男性では週 21 ユニット、女性では週 14 ユニット (1 ユニットは 10 グラムのエタノールに相当) としているが、これを超えていたのは男性では 5%、女性では 2.5% に過ぎず、17% の人はまったく飲酒の経験がなかった。女性では飲酒量が少なく、年齢が高いほど飲酒量は減少した。飲酒者は、非飲酒者に比し活動的かつ社会的であり自覚的健康状態も高かった。ロジスティック回帰分析で相互の関連を調整すると、適量飲酒者 (安全域の飲酒者) は非飲酒者に比し、認知機能障害が低く (オッズ比 : 0.69, 95% 信頼区間 : 0.57-0.85, 31% 少ない)、活動性や自覚的健康状態が高かった。しかしながら不安感を持つ者は飲酒者のほうが高かった (オッズ比 : 1.31, 95% 信頼区間 : 1.07-1.61, 31% 多い)。 結論 認知機能障害があると飲酒量を正確に記載できていないなど断面調査としての限界はあるものの、適量飲酒者では非飲酒者に比べてより良い健康状態であることが観察され、唯一の例外は不安感の上昇であった。	